

七月二十三日

昨日、工作社社主山本伊吾氏との話して、何故異端者と言われるのかと正面から問われたにはうまく答えられなかった。あまりにも正面から問われたからだ。今、暮らしている業界でそう、言われているのだろう事は知っているけれど。業界での評言等には全く興味が無い。しかし、別に孤立を好んでいるわけでもない。自然に孤立するようになっただけだ。この孤立状態をどう、攻撃的構築性の中に表現できるかが、ここ数年の課題だな。山本伊吾編集長、社主は山本夏彦翁の息子さんである。山本夏彦は私の文章書の先生だった。私にいささかの文章を書く事への情熱が無ければ、私はこの業界ではとくに、つぶされていただろう。本格的な異端と呼ばれる人間の末路、老残は酷薄極まる。そんな意味では、今もこうして、とにかく平凡な教師生活、家庭生活も送れているのは山本夏彦のお陰であるのやも知れぬ。足を向けては寝れない。と言っても、どっちの方向に今、山本さんが居るのは定かではない。私の異端振りの小市民性は私の本格的な孤立をさまたげ、同時にそれから救ってもある。その意味で山本夏彦は恩人の一人だろうな。文章を書く事を好きにさせてくれたんだから。山本伊吾氏にはどうやら夏彦ゆずりの偏屈さがある。夏彦さんは真底作家らしい作家であったが、同時にジャーナリストでもあった。典型的なジャーナリストである。ジャーナリストの本分は野党精神だ。今の民主党如きの野党精神ではなく、強いモノには楯つくという本能的な魂を持つ、そんな野の精神である。その

精神、気分の持続と言った方が良いかな、それは要するにヘソ曲りの極みである。多勢というのを信じましょう、というのが民主主義の根本だが、その多勢は時に暗愚と同義で大きな誤りも犯す。それを指摘するのがジャーナリストの大儀であるうから、多勢には時には背を向ける覚悟もある。私みたいに、小さな業界ではあるが、常に多勢無勢では大方常に無勢側、すなわち負け組につくのが続き過ぎると、異端と言われるようになる。でも、大昔に早稲田大学の田辺泰先生が私に説いて聞かせたように異端というのはヨーロッパでは火刑に処せられる、宗教的な意味の内の概念であり、たかが設計業界、しかも日本のような理由のわからぬままの歴史的断絶の果てにある、つまりその存在そのものが、表層的に二流の変種である国の近代建築文化の中では、成立し難い世界の言葉ではある。

そんな事を考えていたら、大学院入試面接に遅刻してしまった。十三時過青山で、浜野安宏氏と会う。北京オリンピックサイトのプロジェクトに関して協力依頼。浜野安宏氏は私とは違う世界の住人であるが、北京のプロジェクトに関してはそんな小さな事はどうでも良い。最適な将を最適な陣に布さねばならないのだ。浜野氏も流石勘は良く、事の重大、面白さをすぐ呑み込んでくれたようだ。十六時頃世田谷村に戻り、浜野氏よりの資料を読みふける。その最中に、かなり大きな地震あり、震度5弱位か。研究室から中国人留学生、陸海が心配して電話してくる位の仲々な地震であった。良く揺れたが世田谷村は全く大丈夫。夕方、クツを買いに出て、帰り宗柳でビールを少々、飲み、戻る。

浜野氏の著作を改めて数冊読み直してみる。釣りに関するモノは、開高健には及ばない。開高健よりも、むしろ実質的には様々な実体験をしているようだが、それは結果として開高の釣り物語

の表現には遠く及ばない。山に関するモノでは、失礼ながら異論がある。浜野氏が登高したグランドティトン（四一三三メートル）、浜野氏は二年間の体力づくりと、三日間のロッククライミング特訓を経て、ティトンに登ったらしい。しかし、グランドティトンの四千メートルの標高はこれも又、浜野氏が行ったらしい、ラダック、ザンスカールの村の高さと同じ位のものだと思いが、いかがか。アジアでは人間の村の高さだ。大体ロッククライミングのトレーニングは三日では出来ないのは歴然としている。ザイルの結び方を知り、各種道具の初歩的な名称と使用方法を知り、二、三回の実験をすれば、それで終わりだ。こんな処に浜野氏の、神が一向に細部に宿ろうとしないのが歴然として見てとれてしまうのだが、プロデューサーは細部にこだわらないのだろう。それでもこの人には才があると感じた。その才とは、歴然としたポピュリズムへの同体感だな。多くの領域の概念を同じシステムで大衆言語化しているところがこの人物の最大の特色だろう。それが成し遂げられているところが凡人ではないところだ。ともあれ、中国のプロジェクトには最適の人なのではないかと思った。